

乳癌の肺転移に、われわれは外科療法を中心に治療を施行してきたが、転移性肺腫瘍の中では予後不良の疾患の一つである。

最近、われわれは37歳女性、呼吸困難を主訴とした右下肺野にみられた癌性リンパ管症に対して、再発乳癌の肺転移と考え、当院で施行している6者併用化学療法“VEMFAH療法”(Vincristine, Endoxan, Methotrexate, 5FU, Adriamycin, Predonisolone)を使用し有効な結果を得ているので報告する。

8. CQのBAIにより完全退縮を来したと考えられる扁平上皮癌の1例

三重大学医学部胸部外科

鈴木俊郎, 磯島明德
草川 実, 久保克行

咳嗽及び喀痰をきたし、胸部レ線で右上葉無気肺所見を呈した47才の男性で、気管支鏡生検により扁平上皮癌の診断にて、エスキノン10mgの気管支動脈内注入を2回おこなった。最初の気管支動脈内注入後、約2ヶ月後に、右上葉切除をおこない、縦隔及び肺門のリンパ節転移を認めず、切除肺の病理検査所見でも腫瘍細胞はみられなかった。

9. 肺癌手術における縦隔鏡の応用に対する検討

国立療養所岐阜病院外科

中納誠也, 小林君美, 井上律子
松村理司, 山中 晃

肺癌における縦隔内リンパ節転移の有無を明らかにすることは、手術適応の判定や治療の撰定に極めて有用である。従って、われわれは縦隔の直接的検査法である縦隔鏡検査を112例の原発性肺癌に行い、若干の知見を得たので、主として、原発巣の発生部位と縦隔リンパ節転移、および縦隔鏡検査所見と手術術

式との関連等につき検討し報告した。更に、その到達部位の拡大の試みとしての、気管後方経路法についても検討を加えた。

10. 肺癌におけるTNM分類による術前術後評価の検討

信州大学医学部第1内科

和田龍蔵, 小沢克良, 藤井忠重
小林俊夫, 望月一郎
半田健次郎, 草間昌三

最近の肺癌手術例36例を検討した。組織型別には腺癌24例、扁平上皮癌7例、大細胞性未分化癌2例、小細胞性未分化癌1例、細気管支肺胞上皮癌2例である。下因子の一致率は67%で胸膜への直接浸潤および播種の術前診断の困難性を示している。N因子の一致率は64%で縦隔リンパ節転移の術前診断の成績が不良であった。切除不能例は8例(22%)あり、これらを中心に評価検討した。

11. 当院における肺癌手術治療成績

市立静岡病院胸部外科

上野陽一郎, 秋山文彌

篠崎 拓, 島本光臣, 田村康一

50例の肺癌手術症例を検討し、市立静岡病院胸部外科における肺癌治療の現状と成績を述べた。5年生存例は26例中4例で、すべて扁平上皮癌であり、手術時stageIIIを示したものが4例中の3例で積極的の外科治療の意義が示された。進行肺癌に対して、我々が行っている心嚢内血管処理法、中枢位傍気道リンパ節廓清法を示した。

12. 右中葉切除を行い局所で悪性所見のあった血管周皮細胞腫の1例

浜松医科大学病理 森田豊彦
藤枝市立志太総合病院外科

甲田安二郎, 錦野光浩
脇 正志, 田中 潔

43才女性。毎年胸部検診を受診。77年5月胸部X-Pで右肺門部に腫瘍陰影を発見され7月6日初診。右中葉に径3cmの円形陰影あり。気管支鏡・腔内異常なし。自覚症状全くなし。7月27日右肺中葉を切除。右S₅近位部の長径3.1cm被膜を持つ略球形帯黄色充実性腫瘍。組織学的には、比較的明るい細胞質を持つ中等大の細胞が敷石状充実性で辺縁圧排性に増殖、一部血管腫様である。この腫瘍の組織診断、鑑別診断及び良性・悪性について検討。

13. 肺内原発神経鞘腫の1例 県西部浜松医療センター

長沢達郎, 大田迪祐, 赤嶺安貞
沢田 敏, 岡本一也

縦隔および胸壁発生の神経鞘腫は、しばしば経験されるが、肺内原発の神経鞘腫は極めて稀で、現在まで13例が報告されているにすぎない。われわれは、最近肺内原発神経鞘腫と思われる症例を経験した。症例は64才の男性で、検診により左肺の異常陰影を発見され、当センターへ入院した。自覚症状は全くなし、種々検索により、肺内の良性腫瘍を疑い手術を行ったが、組織学的に神経鞘腫の結果を得た。同時に文献的考察を行った。

14. 腺様嚢胞癌の治療経験 三重大学胸部外科

金田正徳, 鈴木俊郎, 磯島明德
湯浅 浩, 草川 実, 久保克行

我々はこれまでに3例の腺様嚢胞癌を経験した。これらのうち、腫瘍が気管支内に限局していた1例は手術的に根治し得たが、腫瘍が気管支外まで浸潤していた1例と、肺内転移が認められた1例には、姑息的に気道閉塞による生命の危険を解除する目的で、手術又は経気管支鏡